

化学遺産の第 13 回認定 2

認定化学遺産 第 059 号 「日本化学総覧」 財団法人日本化学研究会 B本の科学文献投録誌の先駆け

油上雄作 Yusaku IKEGAMI

日本化学総覧は財団法人日本化学研究会の諸先輩が中心となって明治 10 年から昭和 38 年までの日本における化学文献と特許をもれなく抄録して印刷、刊行した著作であり、我が国の化学界に広範に利用され、今も引き継がれている。

はじめに

昭和30年代の初め頃、ざら紙の原稿用紙と化学の論文誌を携えた日本化学研究会の方が先生方に抄録の作成をお願いして廻っていた。筆者もよく応対して抄録したが、論文を精読して正しく抄録する機会となって大変勉強になった経験がある。日本化学総覧の編纂が十数人の職員により順調に行われていた時期である。総覧の刊行は東北帝国大学の開学の年に教授に就任した眞島利行教授の発意に始まっている(写真 1)。

眞島利行先生

東京帝国大学理科大学を卒業し同学の助教授として 無機化学を専攻していた真島教授は、有機化学の研究 室を持ちたい旨を当時の櫻井錠二教授に伝えて渡欧 し、キール大学ハリエス教授の下に一度は落ち着い た。ところがまもなく、櫻井先生から近々東北帝国大 学に有機化学の研究室ができるとの電報が届き、これ は無上の幸いと思い、直ちに有難く承認の返電をし た。そしてチューリッヒのポリテクニクムに移って有 機化学をさらに研鑽し、ロンドンでもロイヤルインス ティチューション付属のデビー・ファラデー研究所に

いけがみ・ゆうさく 公益財団法人日本化学研究会 評議員 [略歴] 1953 年東北大学理学部化学科卒業, 54年 同大学非水溶液化学研究所助手, 69年同助教授, 79年同教授, 91年同反応化学研究所教授, 研究所 長, 94年定年退職。東北大学名誉教授, 2000~07 年三島学園女子短期大学学長, 東北生活文化大学 学長, 1985~2008年放送大学客員教授, 1978~ 2013年財団法人日本化学研究会理事, 理事長を歴 任。





写真 1 日本化学総覧第1集および第2集

学び、1911年3月に帰国して東 北帝国大学理科大学の教授に就 任した。東北帝国大学はその年 の9月に開学した。記録による と、当時の仙台市には水道がな く、大量の水を必要とする理科 大学にとっては致命的な状態で あった。眞島教授は、ドイツか ら輸入した自動高圧給水機を設



写真 2 眞島利行教 授 (1874~1962年)

置して急場をしのいだ。仙台赴任を前にドイツやイギリスで様々な準備をしておられたという。

真島利行教授(写真 2)の漆の研究は1900年頃に始まったとされているが、その研究はドイツ留学中には中止され、1913年頃に仙台で再開された。桜井賞や学士院賞を受賞し、有機化学の対象をインドール、トリカブトアルカロイド、紫根色素へと展開し、黒田チカ、小竹無二雄、杉野目晴貞ら著名な諸先輩の名が論文に登場したのもその頃であり、研究の展開の中で化学総覧の刊行を思いつかれた。

我が国の化学文献抄録の必要性

文献検索が化学研究の第一歩であることは誰でも知 ることであり、特に日本固有の対象物の研究を始める 場合はそれが重要である。しかし、我が国の化学関係 の雑誌類は当時よく整理されておらず、その文献検索 は海外の化学関係文献よりも遙かに困難であった。ド イツで 1830 年に創刊された Chemisches Zentralblattt (1969 年廃刊) やアメリカの Chemical Abstracts (1907 年創刊)を調べれば外国の文献はよく調査できたが、 日本国内の和文の論文はこれらに抄録されなかった。 眞島教授は早くからその不便を感じ, 少なくとも総目 録のようなものだけでも欲しいと考えていたところ に, 東北帝国大学附属病院薬局長の奥野政藏氏から, 我が国の動植物成分の論文抄録の提案があったので. 有機化学者である眞島教授はそのことに深い感銘を受 け、数人の協力者を得て早速着手した。しかし、片手 間の仕事であったために時間がかかり、自然に中止の 状態になってしまった。

その抄録は動植物成分を対象としたが、化学のほかの成分と交錯するために選択が難しく、苦慮し、それを解消するために化学関係の文献のすべてを集めることが必要であり、熟慮の末、広い分野の研究者の協賛を得て化学総覧の事業へと進むことになった。眞島教授は後にこう述べている。

余は、部分的抄録で停頓の状態に陥るのであるから、さらに幾層倍も困難な総文献の抄録は如何にしたら成し得るかについて焦慮した。然るに、友人で当時の大学助手の櫛引純二郎氏がこの種の事業に興味を有することを知り、若い学生諸氏と協力すれば、この事業の遂行も不可能ではあるまいと考えた。ここで余は意を決して財団法人啓明会に援助を申請したところ、幸いに大正10年から2,500円を2年間に亘って交付されることになった。ここで、初めて必要な諸経費を支弁することができるようになり、本事業の開始となった」。

抄録事業のはじまりと財団法人の設立

第一期事業として 1877 年から 1920 年までの抄録を

開始し、1923年の初夏までにその原稿ができあがっ た。しかし、出版の交渉に入っていたその年の9月1 日に関東大震災が起こり、発刊の見込みが立たなく なった。ただ、仙台で編集していたために原稿は災禍 を免れた。東京の出版界の復興を待つしかなかった が、再び啓明会の援助を得て第二期事業に取り掛かっ て, 同年までの分を完成することができた。しかし, 1925年になっても出版の見通しが立たず、啓明会に約 束していた眞島教授は大変苦慮し、広く寄付金を集め て自己出版することを決意した。そして、その年の内 に同僚の協力によって3万400円の拠金を得ることが できたので、財団法人日本化学研究会を設立し、抄録 誌「日本化学総覧」を発行することにした。財団法人 の設立は1926年7月15日付けで文部省の認可を受け、 役員は眞島利行理事長, 小林松助, 箕作新六の両理事, 井上仁吉、高岡斉の両監事、それに評議員として本多 光太郎ら12名を連ね、当時を語るに尽きない顔ぶれで あった (図1)。

1877 年からの論文の抄録である第1集・第1巻は1927年8月に発行されたが、全7巻の出版に約10年を要し、1938年2月に第1集の出版を完了した。抄録員は132名にのぼった。近着の雑誌を抄録する第2集は月刊として発行し、第1集よりも早く昭和2年4月に第2集第1巻第1号が刊行された。刊行事務と編集

はすべて理学部化学教室 内で行われ、抄録は当初 は学内の研究者に広く依 頼して行われた。このよ うにして船出した「日本 化学総覧」は、国内化学 文献の完全抄録誌として 多くの研究者や企業の協 力を得て軌道に乗り、発 行部数は年々増加して昭 和12年度には1746部、昭和19年度には3461部 に達した。



図 1 (財)日本化学研究会 創立時の理事,評議員会議 事録

この書類に日本化学総覧編集・ 発行の議決が載っている。

日本化学研究会は当初事務所を米ケ袋の眞島教授の 自宅に置き、編集は眞島研究室の隣室で行っていた が、眞島教授が大阪帝国大学の要請を受けて1933年4月から大阪帝国大学専任教授(東北大学兼任)となったのを機に、事務所を米ケ袋の石川総雄教授の自宅に移し、編集は化学教室のコンクリート建て倉庫で行った。しかし、文献の増加とともに業務は拡大の一途を辿り、化学教室の一角で行うことが困難になったので、1939年に、東三番丁に事務所を購入して東北大学から離れた。印刷ははじめ東京で行っていたが、仙台で行うことが可能になり、1932年から45年まで笹気印刷所で行って、便宜を味わうことができた。

眞島教授の大阪帝国大学転出後, 会の運営は藤瀬新 一郎と富永齊の両教授に任せられたが、第二次世界大 戦を挟んで藤瀬らの苦労は並々ならぬものであった²。 1944年頃から用紙の配給が悪化して毎月の発行も次 第に遅延し始め、ついに、1945年7月10日に仙台が 大空襲を受け、事務室と2棟の書庫を焼失し、記録類 も失ってしまい、笹気印刷所も全焼した。幸いにも第 1集と第2集の紙型は前々日に疎開しており、後に技 報堂からの再版のときに役立った。1877年から1940 年までの総索引原稿は防空壕の中で無事であった。終 戦後は原報誌も激減し、総覧の発行を1年間停止した。 その後焼け跡にバラックを建てて業務を再開し、総索 引の整理に当たった。会員数が激減したために資金が 不足したが、文部省の援助や維持会員の獲得によっ て、1946年末には形の上で完全に復興することができ た。眞島教授は1955年に辞任し、藤瀬教授が理事長に 就任した。

抄録事業の移譲

昭和30年代に入って月刊誌の編集・発行業務は回復したものの、頒布数は1946年の3500部から1200部に急落し、その後一向に回復せず、会の財政は窮迫の一途を辿った。化学の国際化で研究者が外国の抄録誌に頼る傾向が強まったことが原因であった。この状況を苦慮した眞島教授や原竜三郎教授(1954年度日本化学会会長)は、抄録事業は日本化学会が行うのが適当であると考えて折衝を重ねた。その折衝が進展を見ないでいるうちに、1957年4月に特殊法人日本科学技術

情報センター(JICST)の設立が決定した。早速日本化 学会会長から科学技術庁長官宛に, 国内の化学情報は 「日本化学総覧」を活用するか、これを育成することが 望ましいとの要望書が提出された。そして、そのこと が具体化し、第二次の総索引Ⅳが1958年3月から順次 JICST によって刊行されることになった。その移譲の 完璧を期するために、1963年3月に東北大学の定年を 迎えた藤瀬教授は自ら JICST 理事・情報部長として赴 任し、翌年1月に「月刊日本化学総覧」が JICST から 刊行され始めた。総索引の編集は最後まで日本化学研 究会に残ったが、1972年3月31日の第4次総索引の 刊行で化学総覧の仙台での業務は終了した3,40。その後 月刊「日本化学総覧」は1974年に改題され、1975年 から「科学技術文献速報・化学・化学工業編(国内編)」 として刊行されて「日本化学総覧」の誌名は消えたが、 巻号は継続されている⁵⁾。1963年までの抄録文献数が 特許を含めて 34万 8517件, 3万 4211ページ, 事物索 引 2 万 4440 ページ, 著者名索引 1 万 1298 ページの総 覧が、東北大学を基盤に刊行され、協力した全国の抄 録者は一時 700 人近くに達していた。

おわりに

化学総覧業務移譲後,日本化学研究会はその剰余資産をもとに化学研究助成を中心事業とすることにした。新しい寄附行為は1977年4月1日付けで文部大臣の認可が得られ,事業として,(1)情報研究事業,(2)化学研究に対する助成,(3)海外渡航に対する助成を行い,毎年多くの化学関係者に交付されている。

本会の目的であった日本化学総覧の刊行は全国を網羅する画期的な事業として功績を残し、まもなく到来した情報化社会では「日本で最初の本格的データベース」とも評価された。この総覧が時代を超えて長く役立つことを期待したい。

- 1) 眞島利行, 日本化学総覧 1927, 1, 第 1 号序.
- 2) 藤瀬新一郎, 化学と工業 **1959**, *12*, 926.
- 3) 三井生喜雄, 化学と工業 1976, 29, 388.
- 4) 迫利右工門, 薬学図書館 1967, 12, 59.
- 5) 山口達明, 滝口泰之, 化学史研究 2021, 48, 74.

© 2022 The Chemical Society of Japan